

みんなのみどり

通 刊 1 1 号

2010. 10. 31

発行 みどり・山梨

事務所：山梨県甲府市古府中町984-2

(川村方)

電 話：055-252-0288

FAX：0553-33-7620

URL：<http://www.midoriyamanashi.com>

E-mail：kankyo@midoriyamanashi.com

みんなで話そう—シンポジウム「リニアは必要か？」の報告

石原英次

9月26日(日)、男女共同参画センター(甲府)で、シンポジウム「リニアは必要か？」がリニア・市民ネット山梨の主催で開催された。地元山梨の市民だけではなく、東京、長野、神奈川など近隣都県から、また、JR東海労働組合員参加もあり、併せて60人ほどが報告、討論に熱く聞き入った。「みどり・山梨」からも8名が参加し、代表の川村さんが司会をつとめた。

まず前半は、千葉商科大学の大学院客員教授橋山禮治郎さんと川村さんの対談による、報道ではほとんど公表されていない問題点の洗い出しがなされた。その冒頭、主催者から山梨県リニア交通課に出席を依頼したところ、「責任ある回答が出来ない」ということで断られ、庁内リニア推進本部が存在する現実との矛盾を呈した、という報告があった。

さて、対談は主に経営、財源的な側面を中心とした、JR東海の情報開示が少なく片寄せたものであることとあいまって、この計画がとても夢のあるものではないことが興味深く伝えられた。

国土交通省の交通政策審議会を長らく傍聴している橋山さんによれば、JR東海は最短ルート(C)の建設費5.1兆円積算根拠や、81%が地下または大深度地下で用地買収を少なくしても、1km200億円といった費用の中味を明らかにしていない。また、三菱UFJ等の金融機関からの繰入金建設金利が計算に入っていないことなどが指摘された。さらに経営に直結する利益に関しても、2010年4月末、東海道新幹線の輸送力限界打破説の旗を降ろしたことは、利用者数の減少を認めたことになり、前例では利益、客数が2倍にならないと成立しない国の整備新幹線への格上げも不透明であること、つまり経営的には無理がある計画で注意すべきとされた。

他にも民意が反映されておらず、ぜひ来てくれという人は知る限り少ないとか、基本的にはノンストップであることから、地域への面的広がりがない、JR東海の誠意のない情報公開姿勢などが問題とされた。



引き続き後半は、シンポジウムと質疑応答で盛り上がりを見せた。報告者4氏の主な発言は次のとおり。

椎名慎太郎さん(山梨学院大学名誉教授)

1989年、実験線誘致決定の際に21世紀初頭着工(新幹線として)とされていた。当時実現するはずがないと思っていたが、一旦着工してしまうと、政策変更コストを理由に工事はなかなか止まらない。この点には気を付けたい。また現実的、時間的メリットに関して、甲府と新宿間を考えた場合、想定されるリニア駅からのアクセスでは、時間短縮はないと考えられる。その反面新幹線開通による在来線、つまり中央線の間引きダイヤが十分観測できることは、県民にとって不都合ではないか。

また、水脈、断層帯、植物への影響が心配され、南アルプスを世界遺産にという運動とリニアは矛盾している。国立公園として法律上は手を付けてはいけないところであり、自然破壊という点では残土搬出工事と、その沢などへの埋め立てによるものもあると当然考えられるが、一般的にはリニアが通った時の絵しか伝えられていない点も問題である。

船木上次さん(萌木の村・社長)

観光立県とリニア駅はいらないという立場をとり、何事にも多面的に見、すべてのものにメリット、デメリットが存在すると考える。まず、基本として、山梨県がどういう県であるべきかという哲学が必要であるが、現実的には政界、財界はリニアに頼りすぎている。特に山梨のリーダーは、その上に立ってリニアをどんなふうを活用するかの方法について絵を描いていない。

また、まちづくりはそこに残りたい地元の人間が考えることが重要で、さらに様々な道具を使いこなせる能力が必要。自然や景観、あるいは水といったものを山梨の宝と認識し、そして生かすのにこのリニアが必要かどうかを、地域の人間が考えるべきである。しかし、山梨の宝を壊すことになれば、そこに山梨の未来は展望出来ない。ゆったり景色を眺めながら、移動したり滞在するほうが本当の豊かさではないか。

清水絹代さん(都留市議会議員)

これまで地元で川の問題について関わってきたが、リニア実験線工事ではトンネル掘削による水枯れが起きていることもあり、その水脈との関連性に関心があると共に心配である。元々本来の豊かさというのは、スピードのみを追い求めるよりも、自然豊かなところをゆっくり見て歩くということを考える。

しかし、地元では、電磁波が安心なら仕方がないといったふうな、身近に感じていない様子であり、全般的に情報の無さを痛感している。そこでこういうシンポジウムを県内他地区でも催すことが必要と思う。

橋山禮治郎さん

国民が新幹線以上のスピードを鉄道に要望しているのかは何も調査されず、また、山梨県民はどう考えているのかといった事前評価の必要性など、本来民意を反映させることがたいへん重要と考える。そして、今は地域プロジェクトが住民の発言で変わるようになってきている。冷徹な事前評価という点では、一般的に技術、経済、環境のうち一つでも満足水準に達しない場合、必ず失敗すると認識している。リニアは強い電磁波や鉄道としてのネットワークができないといった負の側面も多く、スピードのみを特性とする片寄った発展性のない技

術である。そして様々な心配を解消する証拠が出ない状況で、国の態度として決定のあり方が問われている。

4氏の発言の後の質疑応答の中で、JR東海労働組合からリニアの現実、現状が知らされていない状況であるが、今日のような機会を含めて社会への訴えかけを重ね、市民を巻き込んだ、リニア計画を止める運動体にしていきたいという発言があった。

さらに船木さんからは、椎名さんの1991年のNHKアンケートについての発言を受けて、今それを実施すればリニア推進派のネットワークが築かれているので、推進の割合が多くなるのではないかという、注目すべき指摘があった。

こういうものに繰り返し乗りたいだろうか。運転士はいなくて、2あるいは3拠点を単純に行き来するのみ、ほぼ外は見えない穴ぐらのような筒の中を通過し、その中での安全性は証明されておらず、人はまるでモノとしての扱いになっているような乗りものに。

今年2度目のシンポジウムであったが、回を重ねていろいろな立場の人の報告や思いを聞けば聞きくほど、山梨にとって、人にとって、生きものにとって百害あって一利なしの思いが深まった。この何十年、便利、効率化の言葉に急立てられるようにスピードを上げて急ぐことになったことで、自然が破壊されたことは明白だが、人のくらしはゆったり豊かになっただろうか。

多くの市民も積極的に欲しいという人は少ないと感じるし、こういった報告などを聞けば、はっきり要らないという人が増えるだろうと確信した。

◇8月8日の夏の日曜日にリニア実験線ツアーが行われました。以下は、参加された三名の方からの報告です。

山梨県実験線ツアーに参加して

長野県中野市在住 小林優子

昨年より会員としてお世話になっている小林と申します。実家が中小河原町にあり、きつと近くにお住いの方もいらっしゃると思います。

さて、山梨実験線ツアーでは大変お世話になり、どうもありがとうございました。私が住んでいる長野県長野市以北においても、現在北陸新幹線の延伸工事が盛んに行われています。中野市には駅はできないものの（お隣の飯山市にできます）、たくさんの優良農地を潰して高架橋が造られ、市のシンボルである高社（こうしゃ）山の裾野にトンネルが開けられました。お蔭で麓の地域では沢や井戸の水が涸れ補償問題となりました。

リニアの建設においてもこれから様々な自然破壊が引き起こされると思いますが、皆さんの力を合わせて食い止めたいと思います。



トンネル工事を既成事実にするな

懸樋 哲夫

山梨県内でリニア中央新幹線の実験線延伸のためとしてトンネルや高架橋工事などが進められている。上黒駒トンネル掘削現場、竹居高架橋工事現場で南アルプス掘削現場でもすでに工事中だ。バスツアー（8月8日）で見たこれらのトンネル工事現場は、すでに中央リニア新幹線計画は既定のものかのようだ。

話題の群馬県の八ツ場ダムでは、新政権がダム建設中止を宣言したところ、関係都県知事や地元の推進派が抵抗しているが、その言い方は「もうここまで出来てしまっている、すでに数千億円がたぎ込まれてしまっている、ここでやめたら大いなるムダだ、完成させることが得策だ」と言うものだ。

このダム計画は本体工事が行われる前に、道路やトンネルなど工事を回りから進めて、外堀を埋めてきた、こうやって後戻りを出来ないようにするのが推進派のやり方だ。

北海道アイヌの聖地を水没させた二風谷ダムは裁判で「建設は違法だ」と判決が出たのにすでに工事は終わっていたので撤去はされないまま、つまり作ってしまえば議論も水没、というわけだ。

リニアもこうしてまだ国交省に認可もでていない、審議会で検討中の時期に、ただの実験線のためにトンネルなどを掘っている。

完成までに数十年という時間を要するリニア中央新幹線はこの期間にどのような時代の変化があるかわからない。途上でJR東海的首脳が目覚まして、不要だということがようやくわかったときには、もうここまで出来たのだから、とまた言うのだろうか。

中央構造線に糸魚川静岡構造線などの大断層のある南アルプス、しかも世界自然遺産への登録を目指す運動もされている、ここに穴をあけた後に、リニア建設は中止だ、というのでは壮大なムダであったとなることには違いない。

そうなる前に「もうここまで掘ったのだから」を建設続行の理由にさせないように見張っていきたい。それはつまり、実験線だからといってこれ以上トンネル工事をさせないようにすることではないだろうか。

リニア実験線ツアーに参加して

川村 晃生

リニア実験線の工事を目のあたりにして、何とも言いようのない虚しさを覚えるばかりだ。実験線とはいえ、そのまま本線になるのであろうという確信めいたものを誰もが感じたにちがいない。

とりわけ南アルプスのトンネル試掘現場は、あたかも本坑口のように、該地がそのままトンネルの出入り口として使われるに違いないと感じられた。Cルートで通すことは、はじめから決まっていたように思われる。

こういう自然への冒涇と言えるような所業を、人類の発展と考えてきたのが20世紀の思想だ。愚かな思想に修正を加えることはできるだろうか。日本人に叡智があるかどうかを神から問われている。

〇リニア実験線ツアーに先立つ7月31日、甲府の朝日町夏祭りのフリーマーケットにみどり・山梨は農産物直売のお店を出しました。会員やサポーター、友人たちが甲府や芦川で作った有機栽培の作物です。作物をつくり、当日、店頭に立った3人からの報告です。

甲府朝日町商店街夏祭りに参加して

石原英次

商店街はいずこも沈滞化していると思っていたが、祭りということもあってか、路上を埋めつくさんばかりの人出であった。わが「みどり」の屋台はとっつきにくいオジさんの中に芦川の紅一点という顔ぶれで、用意した野菜などは完売した。大勢の来客者の中に友人・知人の顔はあったが、「みどり」の会員・サポーターの顔が見受けられなかったのが残念であった。ぜひ企画ものにも積極的に出かけてもらいたいと思った。もっと呼びかけ、告知に力を入れ、出店産物について誰が何をどれくらいといった打ち合わせを、今回以上にすれば、5割増しの売り上げは可能だと感じた。「みどり」らしい安心できる食材料は今後十分受け入れられると思う。

朝日町夏まつりに参加して

野田薫(てんころりん村)

朝日町通り夏まつりには、みどり山梨の方々とともに参加しました。テーブルの上に、有機で作った野菜や、自然栽培で作った作物を並べ、買っていただくお客様にみどり山梨の活動や、てんころりん村の活動をPRするという手法をとりました。

てんころりん村は、芦川町で生態を考慮した持続可能な農業を目指して、畑や田んぼで作物を作るほか、様々な方に農業体験や古民家生活体験を提供しています。来て頂くお客様はみんな、生物の豊かさや、自然環境の美しさに感動されなごんだ心で帰っていかれます。そのような所で育った野菜を、朝日町夏まつりで販売し、少しでも伝えることができればと思っています。

しかし、実際は売り手の思いとはうらはらに、夏まつりで買いにくるお客様の多くは、野菜の種類と値段だけに着目していました。たまに、芦川の野菜ならおいしそうねと言っただけの方はいましたが、有機で作った野菜、自然栽培で作った野菜だから買いたいというお客様はいらっしゃいませんでした。主婦は家計のやりくりが大変なのよ、という雰囲気前面におしだした方には、あたりさわりなくただただ販売してしまっている自分がいました。どんな方にでも、もっと積極的に対話し、PRしなければいけなかったなというのが反省点です。

それにしても、残念だったのは、多くの方々がまだ、農薬をいっぱいかけられている野菜と、有機野菜とを区別せず、同じ野菜として見ているということです。朝日町夏まつりに参加して、しみじみと分かりました。だからこそ、自分たちががんばって活動せねばと思っています。

甲府朝日町夏祭り参加について—雑感

森本 優

7月31日の朝日町夏祭りに「みどり・山梨」が何故出店することになったのかと言いますと、会員数を増やすには、日常生活レベルで一般の方々とのつながりを持ってゆくことが大切だとの認識があったようです。その為、最初は、農産物を始めとした定期的な市を模索していたようですが、市を維持してゆくだけの人員等が確保できず、年に一度だけの祭りに参加するだけに止まったようです。

理念先行型の市民運動では、ややもすると理念が純化され、お互いの考え方の違いによって内部分裂してしまう例が数多く見受けられるのですが、理念を実現してゆくには、実利的な支えがどうしても必要であり、その支えを、日常的な経済活動等を通じた人とのつながりに求めない限り、政治的な団体としての成長も望めないのではないかと私は考えています。(単に警鐘を打ち鳴らすだけの役割なら、少数の精鋭達だけでも良いのでしょうか・・・。)

グリーンレター ⑤

まちづくり考

向井 恵子(緑のネットワーク 21 代表)

住み慣れた東京から山梨に移って15年ほどになる。引っ越して間もない頃、近くの小川の護岸工事をめぐって提案型の運動をしたことがある。雑木林の中の溪流に都市型の親水公園は似合わない、里山の自然を生かした風景でなくては、と感じたからだ。ヨーロッパの「多自然型工法」が流行り始めた時代のせいもある。やがて年輩の人々から「昔の川はよかった。魚もいたし、みんなで遊んだもんだ」という声も聞こえてきて、そうか、「多自然型」とは逆輸入だったのかもしれない！ と勘づいた時から私の自然観が変わり始めたような気がする。

二年後ゴミの問題を契機に勢いよく発足した環境団体に参加したが、活動は長続きせず危うく解散しかかった。その時踏みとどまったのはほんの数名ほど。皆気持が盛り上がっていた。NPO法が施行されて程ない1999年早春のひと頃である。

反対運動を始める市民の活力は、問題が落ち着くと「まちづくり」へと向かうことが多いと何かで読んだことがある。皆が次いで着目したのは足下で進行中の事態、耕作放棄地だった。何かできればね、という思いで地元のお年寄りに頼み込み、昔ながらの環境保全型野菜づくりを習う塾を始めることになった。当初は「農のイベントで地域づくり」的な意識だったと思う。それが町村合併後に多様な市民団体との交流があり、さらに国、県、市のお役人を交えての意見交換の場「八ヶ岳南麓風景街道の会(行政と8つの市民団体で構成される)」へと繋がっていく。あまり知名度は高くないが、行政と市民が立場の相違を認め合いながら双方にとって有意義な場へと成長しつつある会だ。その経験で、関心が自治体の「まちづく

り」へと発展するのは自然の流れだろう。思えば、随分遠くまで来たものである。

酷暑が続いた八月のある晩、大学生のグループから電話があった。「まちづくりにおける住民の協力の必要性」に関するヒアリング調査への協力依頼である。今回の対象地になった北杜市は、県内でも市民の地域活動が盛んなことで知られる。「なぜ数多い中から私たちを？」と聞くと、「ネットで調べて、『八ヶ岳南麓風景街道の会』のホームページで知りました」とのことだったが、実は本命と目していたあるNPO法人とは折悪しく連絡がとれなかったらしく、私たちにお鉢が回ってきたわけだ。聞くところでは、NPO法人にはこのような依頼や調査が年中舞い込んで対応に苦慮するという。その点任意団体の私どもに来るのは年間ほんの数件ほど。とは言っても、田畑を活動のフィールドとしているため夏場は多忙なのだが、ふと頭を過ったのが昨今の経済状況のことだ。今どきの若者たちにとっては、就職難の上、就職後も長時間労働でワークとライフの両立などあり得ない状況にあるという。せめて、こういう機会に協力してあげたいじゃんね、よーし！ と、引受けてしまったのはよいが、以降送られて来るメールの内容といい、マナーといい、今どきの学生は実に礼儀正しくきちんとしていると知って、数十年前の自分と比べ、穴があつたら的な思いに駆られたことを白状しておこう。

当日九月初旬の午後、車から降り立ったのは眩しいほどに若々しい男女学生5人だった。リーダーは、柔らかい表情ながらてきぱきとした女性で、盛りだくさんの質疑応答を交わすうちに所定の時間が過ぎ、彼らは到着した時と同じように爽やかな笑顔で次の目的地に向けて立ち去っていった。

「まちづくり」が出会いのキーワードになったとは……。彼らを見送った後に夕刻の空や木々、草花を見回すと、已に秋声の趣であった。学生たちとひと時を共有したことで、以前の積みも積もった時間の塊が押しやられ、いま再び、新しい季節が始まろうとしているのが見えたような気がしている。

「自己紹介」

東京都出身。山梨の自然に惹かれて移住した所謂新住民です。今日まで 多くの先達や仲間に恵まれて活動が続いてきました。オオムラサキセンターの里山愛好会同期生の石原英次さんとの農のつながりで川部源太さんとの出会いもありました。合併前から男女共同参画の委員会活動にも力を入れています。北杜市長坂町在住。

とことん市民・野沢今朝幸の笛吹市議会レポート

主な議会活動

H22 9月定例議会<9/3~9/22>

◎ 一般質問

今回の一般質問では、先回の一般質問において時間の都合で執行当局を質し切れなかった「バイオマス視察研修」に関する質問と、そして目下の笛吹市政でもっとも大きな政治的・政策的争点となっている「多機能アリーナ建設」に関する質問を行った。

① 政務調査費での議員視察研修に職員随行は許されるか

前回の一般質問では、「議員のバイオマス視察研修」に議会費ではなく農林振興費が充てるという不法性＝予算の流用について質した。10分という質問時間ではこの点を質するのがやっつとであり、この視察研修がはらんでいたもう一つの問題点＝「政務調査費での議員参加」という問題点を今回引き続き質問した。質問の趣旨はこういうものである。

まず、政務調査費（市から議員に支給）での議員活動は視察研修も含め、公務としては認められない、というのが異論のない法解釈である。公務でないなら、当然、職員の随行も許されないことになる。にもかかわらず、この度の「バイオマス視察研修」では参加議員14名中5名が政務調査費を充てて参加している。この5名に係わる随行職員の研修費用は不正支出ではないか。—こういう質問である。

このような質問に対し、副市長が答弁に立ったが、その答弁のほとんどは訳の分からない言い分であり、また質問の主旨からはずれるものであった。しかし、一つだけはっきり聞き取れたのは、「議会職員が随行したのでなく、農林振興課の職員が随行したので、それは随行には当たらない」という言い分である。だから、政務調査費で参加していた議員がいたとしても、不正な支出とはならない、という訳である。

だとしたら、一緒に行った職員は何だったのか。14名中9名の公務で参加した議員にも一人も随行議員がいなかったということなのか。とんでもない言いのがれである。—このようにもっと鋭く追及すべきところを、今回の質問では、時間に追われていたとは言え、甘く終わってしまったことは反省しなければならない。

質問の最後に、「間違いを認めないのが行政文化」だと言われているが、笛吹市政もやっぱり残念ながらこの悪しき行政文化に染まっている」と断じて次の質問に移った。

なお、先のレポートでも指摘したように、このようないい加減な形で視察研修を実施してしまう背景には、執行当局との議会側の緊張感の無さ、とりわけ最大会派である「笛政クラブ」の緊張感の無さがある点を再度指摘しておきたい。

② 「多機能アリーナ」はそれほど必要か

一般質問をするために、議会事務局に質問通告書を提出した時点では、「多機能アリーナ」関連の補正予算は計上されるかどうか不明であったが、本会議開催時点には、1685万円の補正予算が計上された。市当局は、圧倒的多数の市民の反対にもかかわらず、経緯節に向けて強引なスタートを切った。そういう訳で、2番目に用意していた「多機能アリーナはそれほど必要か」—というはより重要性を増した。質問では以下の3点を質した。

1. まず、市長はこの事業に政治と命をかける決意はあるのか。
2. 「全市的一体感の醸成」を目的としているが、これほど莫大な金をつけないければならないような行政課題か。また、この目的を達成するために他の方法は検討したのか。
3. 多くの市民は反対にもかかわらず、建設を進めなければならない理由は何か。

「多機能アリーナ」建設は、その規模（観客席2000席、バスケットコート3面分の敷地面積4ha）から見ても、その経費（建設経費40億前後、年間維持管理費年1億円程度）からみても、今後の笛吹市政に大きな影響を与える事業である。このような事業であるにも

かかわらず、私の質問には市長自らが答えることなく、経営政策部長が答えた。これまでの説明では市民のほとんどが納得できていないので、私としては、市長自らが市民への説得力ある言葉を発することを期待しての質問であっただけに、とても残念である。「多機能アリーナ建設」に命をかけて頑張るとまで言い切った市長なら、自ら矢面に立って、市民の説得にもっともっと努めなければならないのではないかと思うのだが。

部長の答弁は、まず建設ありきという立場に立っているのです。こちらの質問に真面に答えようという姿勢は感じられない。そういう中で、私の中にしっかり記憶されたのは次のような言明である。「6割の市民の反対のアンケート結果も、建設検討委員会の両論併記という結果も、アリーナ建設に向けて乗り越えなければならない課題がどこにあるのかを知るためのものであり、それによって建設の合否が問われるものではない」という主旨の言明である。このような言い方を聞けば、まず建設ありきという姿勢が明々白々であることが分かる。

ところで、当日、この私の質問を傍聴にきた3人の女性（プラスもう一人の女性）が中心になって、「多機能アリーナ建設反対」の署名活動を展開することになるのだが、その署名活動の直接のきっかけになったのは、部長のこの発言ではないかと思われる。なにしろ、3人の女性はこの部長の発言に怒りを露にしていたからである。

今回、「多機能アリーナ建設」に向けての基本設計料等の補正予算は議会を通してしまったが、どの面からしても正当性のない「多機能アリーナ建設」に対し、建設反対の署名はまさに燎原の火のごとく広がっている。私もそれに連帯していくために建設反対の議会活動をさらに活発にしていかなければならない。

議会・議員の実態（その6）

～「質問」という意味が分からない議員

二元代表制の自治体政治にあつて、執行当局を監視するという議員の最重要な機能がもっともよく発揮されるのは、議会における「代表質問」「一般質問」の場面である。市政に関することであれば、どのような立場からであろうと、どのような切り口からであろうと、「質問」を行うことができるからである。執行当局は「代表質問」「一般質問」で取り上げられる事案に対し、答弁を拒むことはできない。だから、市民を代表する市議会議員にとって「代表質問」「一般質問」は極めて重要な議会活動であると言える。

そういうことであるにもかかわらず、笛吹市議会のかんりの議員は、この場合の「質問」の意味が分かっていないようだ。そのため、「質問」の本来の体を成していないことが多い。

議会での「質問」とは、この言葉が一般に使われているような、つまり「知らないことやまた聞きたいことを相手に述べるように求めること」ではない。議会での「質問」とは、執行当局の政治姿勢や政策・事業を、文字通り問い質すことである。要するに市民の立場から、市政のおかしなところを批判し、それを正すことに、その「質問」の眼目があると言える。

では、今回の定例議会の「一般質問」を例にとって笛吹市議会議員の「質問」の実態をみていこう。今回は7議員から合わせて12件の質問が出されているが、それをちょっと強引に分類してみると以下のようなになる。

①事業の進捗状況や事業内容、それに沿った事業を問うところに、質問の主旨があるものが5件。

②議員自らの施策・事業の提案が質問の中心となっているものが4件。

③そして、執行当局の政治姿勢や実施事業を批判し、それを正すことに力点をおいているものが3件。

このようになっているが、①の「質問」など議会でわざわざすべきものとは思われない。そのようなことは「質問」する前に事前に調べておき、その上に立って正すべきことがあるなら「質問」すべきであるが、そうでないならあえて「一般質問」で取り上げるようなことではない。へたをするとこのような「質問」は執行当局の実施していない事業やこれから実施したい事業の宣伝等に議員が使われるおそれさえある。

②の「質問」は議員の議会活動としては重要なものであるが、執行当局の政治姿勢や対象としている事業をしっかり議員自身が評価し、批判したうえでなければ、その提案も簡単に受け流されてしまう。また、そうでなければ、その提案自体も説得力をもちえない。

「一般質問」の本来の姿である③のかたちの「質問」は私の質問を含めて全体の1/2分の3しかない。かなりお寒い状態である。県議会でもそうだが、①のような「質問」が巾をきかせ、そういうものも「質問」であると今後も勘違いしていくなれば、市民は市議会に何の期待もしなくなり、議員自ら、昨今強まりつつある「議会不要論」に模することになる。

「多機能アリーナ建設」がいい例であるが、独断専行の本質にある笛吹市政を市民的立場からしっかり監視していくためには、ますます③のかたちの質問、つまり、執行当局の政治姿勢・実施している施策・事業を市民の視点から批判し、それを正していく質問が重要になってきている。

編集後記

◇朝日町夏祭りでは、なかなかの売れ行きでやれやれほっと一息。しかし、みどり・山梨やてんころりん村のPRは今一つだったようだ。◇今日、失われた10年ならず、失われた20年になりそうなくらい、経済は悪化している。誰もが先行きに不安を抱えていることだろう。消費者が少しでも安いものを求めるのも無理からぬことだ。私も含めて。◇そんな折、有機栽培の農作物の支持はどうやったら広げることができるのだろうか。単純に考えることはできないが、いくら有機栽培についての知識、科学を説いても、「知」では人はなかなか動かない。もし動くとするれば、生産者とかかわるなかで何かを諒解したときだ。◇割高でも有機作物を選ぶ人は、一部のマニアックな人を除けば、大概是農家出身であったり、有機農業のお手伝いの経験があったり何らかの形でかかわりがある人たちが多く。◇割高でも有機作物を選ぶ消費者は、単に安心・健康だけを求めるわけではない。そこには生産者とその住む自然世界を支持し、継続を願う気持ちもあるはずである。◇この関係づくりは今まで様々な方法で試みられてきたが、これからの時代は改めて問われるようになる気がしてならない。◇執筆者のみなさん、多忙の折、ご協力をいただきありがとうございます。みんなのみどりは創刊以来？初の10頁となりました。多くの人の執筆があって、内容豊かな機関誌になればと思っています。(M・A)